

文系

令和八年度 東京淫夢大学入学者選抜試験問題

## 国語

【文・法・経済・教育学部】

二〇二六年二月二六日(木)実施(一二〇分)

### 【注意事項】

- 一、試験開始の合図まで、この冊子を開いてはならない。
- 一、落丁、乱丁、印刷不鮮明な箇所などがあつたら、直ちに申し出よ。
- 四、大きさの不適切な枕があつた場合は、試験監督に申し出、回収してもらふこと。
- 五、氏名及び解答は必ず各問題別の答案用紙の所定の欄に記入すること。
  - 一、この冊子の余白は草稿用に使用してよい。
  - 四、試験時間中に野獣の咆哮が聞こえた際は、試験監督の指示に従い避難すること。
  - 八、試験時間中は周囲の人の答案用紙をチラチラ見てはならない。
  - 十、試験終了後退室の許可があるまでは、退室してはいけない。

一 次の文を読んで、後の問に答えよ。

【文章Ⅰ】

私は日頃からスマートフォンをよく利用している。中でも動画投稿アプリは特に重宝しており、たとえその日に嫌なことがあっても、スマートフォンを開けばすぐに別世界に入り込んだような気分になれる。タテ型動画は、私に世界中の面白いミームやネタ動画を提供し、手軽なドローパミンを与えてくれる。ヨコ型動画も、流行にのったMAD動画や、コア層向けのネットミーム動画を提供し、束の間の休息を届けてくれる。

このようにして、現代社会ではネットミームは日常的な「ゴラク」として広く共有されている。しかしその中には、販売を目的に撮影された映像や、個人の顔・身体が映った画像が、本人の同意なく加工・拡散されているものも少なくない。適当なSNSを開いてみても、有名な画像や映像を使ったネタ画像・投稿が散見される。しかしSNS市場が肥大化した今、こうした投稿が取り締まられることはあまりない。取り締まるのに必要なコストがデカすぎるからだと考えられる。

こうした現状に対し、「多くのネットミームは肖像権を侵害している」という批判がある。一方で、ネットミームが私たちに楽しみや安らぎを与えてくれるのも事実であり、その恩恵を無視することはできない。「現代社会において、我々はネットミームとどう付き合っていくべきだろうか。」

この問題を考えるにあたり、まず肖像権侵害について整理する必要がある。肖像権とは、自分の顔や姿を無断で撮影・利用されない権利であり、個人の尊厳を守るための重要な権利である。これが守られない場合、一個人の顔や身体の写真がネットで拡散されることにつながる恐れがある。そして、ネット上に一度拡散された画像や動画は半永久的に残り続け、当事者が意図しない文脈で消費される可能性が高い。さらに、<sup>(6)</sup>「チヨウシヨウや中傷の対象となれば、精神的苦痛や社会的評価の低下につながることもある。」

一方で、ネット上のミーム動画が肯定的な影響をもっているのも事実である。笑いや共感<sup>(7)</sup>は人の心を軽くし、孤独感を和らげる力を持つ。特に、不安やストレスが多い現代社会においては、一本の動画が気持ちを切り替えるきっかけになることも少なくない。実際に、面白い動画を見て精神的な落ち込みを克服した人がいる以上、ネットミーム文化そのものを一概に否定することは現実的ではないといえる。

さらに、この問題を(1)サクソウさせているのが、AIを用いた映像生成技術の進展である。ディープフェイクなどの技術により、実在の人物に酷似した顔や姿を簡単に作り出すことが可能になった。その結果、「どこまでが本人といえるのか」「どの程度似ていれば肖像権侵害なのか」という線引きは、これまで以上に曖昧になっている。(2)法的に明確な基準を設けることは難しく、従来の肖像権保護の枠組みは技術の進歩に追いついていないのが現状だ。

では、肖像権の尊重を目指すために、私たちには何ができるのだろうか。

まず重要なのは、動画や画像に映っている人物が、実在する個人であるかどうかを確認する姿勢を持つことである。もし存在が確認されている人物であれば、その映像や画像を用いた作品を安易に拡散しないという態度が求められる。一方で、その人物の性別すら分からない場合や、現実世界に存在した痕跡が確認できない場合など、架空と考えられる人物については、肖像権を持つ主体そのものが存在しないため、同じ配慮を必要としない。肖像権はあくまで「権利を持つ実在の個人」を前提とした権利であり、この点を意識することが、表現の自由を守ることもつながる。

以上を踏まえると、ネット上のコンテンツは人を救う力を持つ一方で、人権侵害という重大なリスクも併せ持っていることが分かる。確かに、ネットミームは面白い。しかしAI技術の発展によって法的規制が困難になる中、これからのネットミーム文化において重要なのは、制度だけに頼るのではなく拡散する側一人ひとりの冷静な判断である。例えば、最近私は長年にわたって実在が確認されていない、とある性別不詳の女性に関するコンテンツを楽しんでいる。このような(3)賢い選択をすることで、我々一人ひとりが人権の尊重に貢献できるのである。

冬が過ぎて春になり、春が過ぎて夏になり、夏が終われば秋を経てまた冬になる。ネットミームの(4)エイコセイスイは早いもので、一つのコンテンツは永遠には輝けない。我々はそれぞれのミームの夏の部分だけを楽しみ、冬になれば捨ててしまう。しかししも、真夏であり続けるネットミームがあれば、それはやがて文化へと昇華するのではないか。そうなってしまったら、我々は一つの文化としてそのコンテンツを保護せざるを得なくなってしまう。肖像権の尊重と文化保護のどちらを優先すべきか。(4)今、我々はネット文化と人権の関係を改めて問い直す時代に生きているのかもしれない。

(鎗升根『頭にきますよ!』より)

## 【文章Ⅱ】

平成期のインターネット<sup>(c)</sup>黎明期は、ある意味では天使の楽園であった。そこでは、限られた参加者同士が関心を共有し、現実社会で居場所を得られなかった者も、経済的に自立していない者も、相対的に平等な立場で活動することができた。いわばインターネットは「内輪」として機能し、その内部では独自の規範や美意識を伴ったコンテンツが形成されていった。それらのコンテンツは、外部からの評価を前提とせず、統一的な指導者が存在したわけでもない。それにもかかわらず、動画や文章といった媒体を通じて自律的に規則が形成され、サイバーワールド全体に拡散していった。この点にこそ、当時のインターネット文化の特質があったと言える。

しかし、インターネットの全国的普及は、その構造を変質させた。かつて「内輪」として機能していた空間は、参加者の急増によって境界を失い、内と外の区別が曖昧になった。掲示板の会話は断片化され、再編集され、ショート動画として消費される。共有されていた映像や言語表現は「ネットミーム」として<sup>(f)</sup>揶揄され、外部の視線のもとに晒されることとなる。

そもそもネットミームとは、本来ある共同体内部で成立した文脈依存的な表現が、外部へと拡張し、流行として再編成される過程にあるコンテンツのことである。有名になること自体が直ちに否定されるべきではない。しかし、有名になるとは、評価の制度へ組み込まれることを意味する。評価の対象となった瞬間、内輪の論理は外部の基準によって測られる。その結果、内輪で許容されていた表現は批判の対象となり、創作者は外部からの関心を意識せざるを得なくなる。過度な大衆化が招く結末、それは<sup>(g)</sup>本当の意味で自由な創作活動の終焉である。

さらに、一度広く共有されたミームは忘却されにくい。流行が終息しても、その名称は記憶に残り、再び想起される。したがって、かつての内輪を同一の条件で再構築することは困難であるといえる。それは、評価の視線が可視化された瞬間から持続的に作用するからである。

もつとも、大衆化が全面的に否定されるわけではない。若年層の参入は、文化の継承と変容を可能にする。新たな担い手が登場することで、ミームは変容し、別の形態へと展開する可能性を持つ。インターネットとは、本質的に関心の移動と再編の場であり、固定化された共同体の永続を保証するものではない。

それでもなお、<sup>(e)</sup>かつての内輪は戻らない。内と外の境界が溶解した現在において、我々にできることは、新たな局所的共同体を模索し続けることである。閉じられた楽園は失われたが、限定的な共感の場を構築することはまだできる。もし内輪が破れたのであれば、また内

輪を誕生させるまでである。

春が再び訪れるとは限らない。しかし、新たなコンテンツの源泉を自ら生み出すことは可能である。内輪の破壊と構築が無秩序に繰り返される、インターネットの（g）コンテンツ時代が、まさに今訪れようとしている。

（焼田夏奈『野獣の咆哮がもたらすもの』より）

問一 傍線部(a)～(g)について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

問二 傍線部(1)について、著者がこの問いに対して出した結論をまとめよ。

問三 傍線部(2)とあるが、その理由を簡潔に説明せよ。

問四 傍線部(3)について、「賢い選択」を説明したものとして最も適切なものを次のうちから一つ選べ。

- ① AIによって生成されたネットミームの動画を楽しむこと。
- ② 架空と考えられる人物に関するネットミームを楽しむこと。
- ③ 法律による規制がされていないネットミームを楽しむこと。
- ④ 女性に関するネットミームを楽しむこと。

問五 傍線部(4)とあるが、それはなぜか説明せよ。

問六 傍線部(5)はどうか、説明せよ。

問七 傍線部(6)について次の問いに答えよ。

- (i) 著者がここで述べている「内輪」とは何か、説明せよ。
- (ii) 「戻らない」のはなぜか説明せよ。

問八 文章Ⅰと文章Ⅱの双方の著者は「ネットミーム」をどのようなものとして捉えているか、その相違点を説明せよ。

問九 文章Ⅰの著者である鎗升根が書いた作品を次の選択肢から一つ選べ。

- ① 淫夢語録全集
- ② 真夏の夜の豚夢 第四章 野豚先輩
- ③ ありがとう、茄子
- ④ ホモと見るインムチャーハンの作り方

二

次の文を読んで、後の問に答えよ。

二十年以上も昔のことだ。あの夏のあの日だけは、いまでも奇妙なほど鮮明に思い出せる。私がまだ水泳部に所属していた頃、大学対抗の大きな大会を目前に控えていた時期のことである。

あの頃の私は、ただ速く泳ぐことだけを考えていた。水面を切る音、塩素の匂い、肺が圧迫される感覚。それらが世界のすべてだった。そしてその世界の中心にいたのが、憧れの先輩、Tさんである。

Tさんは部のエースだった。長い手足、無駄のないフォーム、鋭いターン。記録以上に、練習後にふと見せる穏やかな笑みが、私にはまぶしかった。あの人のように泳げたらと、本気で思っていた。

ある日の練習後、Tさんが①何気ない口調で言った。

「遠野、うちに来てみないか」

胸の奥が高鳴った。誘われた理由を考えるより先に、私はうなずいていた。

昼下がりの道を二人で歩いた。セミの音が容赦なく降り注ぎ、舗道の照り返しがまぶしかった。②隣を歩くTさんの影が、自分のそれより少し長く、頼もしく見えた。

③Tさんの家は下北沢の静かな一角にあった。落ち着いた色合いの大きな一軒家。門をくぐった瞬間、自分が場違いな場所に足を踏み入れたような、わずかな緊張が胸をかすめた。それでも、その違和感を振り払うように、私は後をついていった。

リビングは広く、柔らかな光が満ちていた。深いソファに腰を下ろす。すると、Tさんが小さく息をつき、

「今日の練習、きつかったね」

と言った。その声にいたわりが混じっているのを感じ、胸の奥が熱くなる。エースに認められている――ただそれだけで、自分が少し誇らしく思えた。

やがてTさんは、何でもない調子で言った。

「まずうちさ、屋上あるんだけど、焼いていかない？」

一瞬、ためらいがよぎる。他人の家で日光浴などしたことはない。それでも、断るといふ選択肢は浮かばなかった。憧れの人と過ごせる

時間を、自分から終わらせる勇氣はなかったのだ。

屋上に出ると、真夏の空が近かった。私たちは水着姿になり、コンクリートの上に敷いたマットに横になった。プールとは違う、都市の上空に晒された肌が、落ち着かないほど無防備に思えた。

セミの声が、絶え間なく空気を震わせる。

「オイル、塗ろっか」

Tさんの声は穏やかだった。

胸のあたりに冷たい液体が広がる。手のひらがゆっくりと滑る。その丁寧さに、説明のつかない緊張が同時に芽生えた。

今度は私が塗る番になった。胸から腹へ指を伸ばす。Tさんは目を閉じている。まるで何かに身を委ねているような、<sup>(4)</sup>静かな微笑み。しばらくして、Tさんが言った。

「喉、渴かない？」

私はうなずいた。乾ききった喉が急に意識される。Tさんが部屋へ戻るあいだ、空を見上げた。セミの声は相変わらず激しく、それなのに、自分の周囲だけが妙に静かに感じられた。

やがて戻ってきたTさんの手には、アイステイーの入ったグラスが二つあった。

「アイステイーしかなかったんだけど、いいかな」

私はうなずき、受け取って一息に飲み干した。冷たい液体が喉を落ちていく。渴きが引いていくのを感じながら、グラスを置いた。そのとき、向かいに座るTさんのグラスが、ほとんど減っていないことに気づいた。<sup>(5)</sup>だが、深く考えることはしなかった。

空が曇りはじめ、風が少し強まった。

「戻ろっか」

立ち上がった瞬間、足元が揺れた。地面が遠ざかるような感覚。視界の端が暗くなる。心臓の鼓動だけがやけに大きい。おかしい。

そう思ったとき、Tさんの姿がにじんだ。その表情が笑っていたのかどうか、いまもはっきり思い出せない。セミの声が、ふっと遠のいた。そして私は、その場に崩れ落ちた。

(遠野まづうち『私の回顧録』より。)

問一 傍線部(1)について、その意味として最も適切なものを次の選択肢から一つ選べ。

- ① 特別な意図や深い意味があるわけではなく、さりげないさま。
- ② 意識していないため、本人にも自覚のないまま行われているさま。
- ③ 相手に配慮を示そうとするが、それを表に出さない控えめなさま。
- ④ 重要ではないこととして、備考程度で相手に示しているさま。

問二 傍線部(2)について、「頼もしく見えた」のはなぜか説明せよ。

問三 傍線部(3)について、「Tさんの家」の住所を書け。

問四 傍線部(4)について、これに該当するものを次の選択肢から一つ選べ。

①



②



③



④



問五 傍線部(5)について、このときの主人公の心情を説明せよ。

問六 この文章全体を通してセミに関する描写がよくみられるが、セミの声がこの文章において何を表しているのかを考えて説明せよ。

三

次の文章は、デカ枕草子の第八一〇章『やじうのごとき先輩』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

今は昔、田所かうじといふ者ありけり。水泳部にまじりて後輩を狩りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、<sup>(1)</sup>やじうの先輩となむいひける。

その水泳部の後輩の中に、とほのといふ人おりける。<sup>(2)</sup>こころにくきさまにて、言動もものしづかに、まことにやんごとなき人なりけり。かくて田所、かの人を得むと思ひを定め、とほのに言葉をかけて、<sup>(3)</sup>やじう庵へと招きたり。とほのもまた、その心を疑はず、誘ひに従ひて、ともに道を行き<sup>(4)</sup>ぬ。

時に、夏の盛り、蟬の声木々の間より絶えず聞こえたり。

やがて、ひとつ家の前に立ちとまりて、「ここ」とのみいひけり。とほの、家のさまを仰ぎ見れば、その広く高く、ただならぬさまに心打たれて、ただ感嘆の息を漏らすばかりなり。

<sup>(5)</sup>率てられてきざしをのぼり、「入り給へ」といはれて戸より内に入りぬ。はきものを脱ぎて、室のうちへ入りなんとする折、田所ふと立ち止まり、<sup>(6)</sup>とほのに向かひて心を改むべきよしを語り勧めたり。

居間に入りて座に着き、田所、声を和らげて言ふ。

「<sup>(7)</sup>けふの鍛錬、いと苦しかりしな。されど、まもなく大事の競ひを控へたる身なれば、耐へ忍ぶほかあるまじ。」  
かく言ひて、とほのの労をねぎらひぬ。

やがて田所、思ひつきたるやうに言ひける、

「この家には日を受けるに、ことのほかよき場所あり。しばし上りて、身を焼いては如何。」  
とほの、これを聞きて、心より嬉しと思ひ、顔に喜びをあらはし、ためらふことなく、<sup>(8)</sup>その誘ひを受けたり。

問一 傍線部(1)を現代語訳したものを漢字四文字で書け。



#### 四

次の文を読んで、後の問に答えよ。

東京淫夢大学迫真空手部の部員である鈴木、三浦、木村の三名は、今日の激しい稽古を終えて自分たちの部屋に戻ってきた。以下は、その後に続く一場面である。

合宿二日目のメニューがよほどきつかったのだろう。三人とも疲労困憊のまま部屋に戻ってきた。扇風機もない和室には熱気がこもっている。荷物を放り出すと、三人は同時に服を脱ぎ始めた。

鈴木「ぬわあああああん疲れたもおおおおん」

三浦「チカレタ…」

鈴木「いやもうキツかったつすね今日はー」

三浦「ああもう今日は…すっげえキツかったゾ」

木村「ホントに…」

鈴木「何でこんなキツいんすかねえもも…」

木村「キツイですね…」

鈴木「やめたくなりますよ、なんか部活う…」

三浦「どうすつかなく俺もな…」

三浦「ハァ…」

鈴木「三浦早いつすね…」

三浦「シャツがもう…ビショビショだよ」

木村「いウフフツ」

鈴木「風呂入ってさっぱりしまししょうよ…」

三浦「入ろうぜ二人とも」

木村「そうですね」

三浦「うし」

三浦は服を脱ぎ終わって一目散に風呂場へと向かう。

鈴木「ふぁー、待ってくださいよお」

鈴木は三浦の後を追いかける。

三浦「おい、木村早くしろ」

木村「あっ…」

鈴木「早くしろよ」

宿泊部屋に備え付けられている小さな風呂場に一行は入った。まず木村が湯船に浸かる。

鈴木「バックサイド洗いますね」

三浦「オッス」

鈴木「ああもう、疲れましたねえもう」

三浦「ああ今日は…大変だったなーもう」

鈴木「こんな毎日続いたらもう、やめたくなりますよね」

木村「ですね…」

三浦「なあ。木村も今日疲れたろう、なあ」

木村「疲れました」

三浦「なあ？」

鈴木「じゃあ流しますねー」

三浦「おお、頼むぞ」

鈴木「ドアラア…」

三浦「ふう…」

鈴木「頭いきますよ」

三浦「おっ」

鈴木は頭から水をかけて三浦の体を流す。三浦は満足そうに頭を抱える。

三浦「あーもう一回いってくれ」

鈴木「え、いいっすか？はい」

三浦「お、サンキュ」

鈴木「はい」

【中略】

三浦の体を洗い終わって去ろうとする木村に、三浦は難癖をつける。

三浦「あつ、おい、待てい」

鈴木「ふう」

三浦「まだ肝心な所洗い忘れてるゾ」

木村「え、肝心な所…？」

三浦「何トボケてんだよ、ここ洗えよ」

木村「あ、わかりました…」

鈴木「X…」

鈴木「何だ木村嬉しそうじゃねえかよー」

木村「いや、そんなこと…」

【中略】

一行は風呂場から出る。

風呂場のドア「<sup>③</sup>バン！ババン！バン！（迫真）」

三浦「ふぉっふぁっつー」

鈴木「ふぉっ、ビール！ビール！あっつー！」

三浦「あっ早く早くビール飲もうぜっ。おっ、冷えてるかっ？」

鈴木「んあ、大丈夫っすよ、バツチェ冷えてますよ」

鈴木「FOO!!!」

一同は畳の床に座りくつろいでいる。木村が持参した本を読んでいる傍ら、三浦と鈴木が雑談している。

鈴木「三浦さん夜中腹減らないすか？」

三浦「腹減ったなあ」

鈴木「ですよねえ」

三浦「うーん」

鈴木「この辺にい、うまいラーメン屋の屋台、来てるらしいっすよ」

三浦「あっ、そっかあ…」

鈴木「行きませんか？」

三浦「あっ、行きてえなあ」

鈴木「行きましようよ」

鈴木「<sup>④</sup>邪険、夜行きましようねっ」

三浦「おっ、そうだな」

鈴木を適当にあしらってから、三浦は唐突に木村に言いがかりをつけ始める。

三浦「あっ、そうだ。おい木村ア！」

木村「あっ、はい」

三浦「お前さっき俺ら着替える時チラチラ見てただろ」

木村「いや、見てないですよ」

三浦「嘘つけ絶対見てたゾ」

木村「何で見る必要なんかあるんですか」

??「ブッ！」

鈴木も三浦に加勢して木村を責める。

鈴木「あっお前さ木村さ、さつきヌツ：脱ぎ終わった時にさ、なかなか風呂来なかったよな？」

三浦「⑤そうだよ」

二人の迫力に押され、木村はしどろもどろになる。

木村「い、いやそんなこと…」

三浦「見たけりゃ見せてやるよ」

三浦が立ち上がった。

(誘惑のラビリンス 第三章『空手部・性の裏技』より。)

問一 傍線部(1)について、木村がここで笑った理由を説明せよ。

問二 傍線部(2)について、このときの鈴木的心情を説明せよ。

問三 傍線部(3)について、ドアの音が迫真である理由を答えよ。

問四 傍線部(4)について、「邪険にする」の意味として最も適切なものを次の選択肢から一つ選べ。

- ① 相手をうとましく思い、冷たくあしらうこと。
- ② 相手の誤りを非難し、正そうとすること。
- ③ 周囲との雰囲気や険悪にし、関係を悪化させること。
- ④ 故意に仲間内の関係を壊す態度をとること。

問五 傍線部(5)について、このように他人の発言を利用することを何というか。漢字二字で答えよ。

問六

X

に当てはまる言葉は何か。次の選択肢の中から一つ選び、選んだ根拠を明確にして364字以上514字以内で理由を書け。

- ① とんにく
- ② やんほぬ
- ③ かんのみほ